二〇一四年八月一五日

無人駅降りて展けし豊の秋　かず
向日葵の園の迷路に迷ひけり　あさこ
眼瞑れば玉音の日や蝉時雨　ひさ野
新涼や歩幅大きくウオーキング　満天
帰省子にけん玉習ふ爺と婆　よし女

二〇一四年八月一四日

干されたる漁網の匂ふ秋の浜　宏虎
寝ね惜しむわが故郷の星月夜　かず
星涼し丘の町へと降るごとし　菜々

二〇一四年八月一三日

堂縁に干梅匂ふ札所寺　なつき
台風禍倒れし蕎麦の花起こす　みちほ
かなかなの声に昏れ初む神の杜　うつぎ

二〇一四年八月一二日

豊秋に囲まれてをる札所寺　雅流
流木のうち重なりし崩れ簗　なつき
薄雲に浮きつ沈みつ十三夜　ともえ

二〇一四年八月一一日

庭の花剪り添へ父母の墓参り　菜々
箒目のしるき参道蝉しぐれ　つくし

二〇一四年八月一〇日

ハーモニー途切れがちなる秋の蝉　満天
救急車間遠にひびく台風裡　満天
夏痩せて指に絡まる抜け毛かな　なつき
新涼に聞き耳立てて猫眠る　有香
ポストまで行かねばならぬ台風裡　ともえ
伊那谷の湯に身をゆだね夏惜しむ　せいじ

二〇一四年八月九日

秋風に肩寄せあへる羅漢かな　宏虎
連鎖して燭の火揺るる施餓鬼棚　なつき
風うけて尺取り宙に舞ふばかり　よし女

毎日句会みのる選・二〇一四年八月一八日